



森と暮らしの手引き

2066年

伊那市の目指す姿 = 「浸透する森」

2016年、伊那市は「伊那市50年の森林(もり)ビジョン」を策定しました。その基本理念は“山(森林)が富と雇用を支える50年後の伊那市”です。森林の利活用が市民参加で進められている状態 = 社会林業都市(ソーシャルフォレストリー都市)をめざそうと呼びかけています。

ミドリナ委員会は、このビジョンを実現させようと動く多彩な市内外の有志の集まりです。未来の伊那市がどんなソーシャルフォレストリー都市であってほしいのか、市民の目で描いてみました。

その目指す姿が「浸透する森」。

それは、暮らしのすみずみまで、森が浸透している社会のこと。

ここに暮らすだれもが、森や木を身近に感じ、活かし、

それぞれのかたちで関わっている――。

そんな姿をめざして日々を重ねた50年後の私たちのまちは、

豊かさに満ち、悦びにあふれています。

Life

森が暮らしを支える

森への入り口はまず、私たちの日々を取り巻くものから。

建物、家具、生活道具に加え、薪などのエネルギーや食材についても、森のめぐみが溶け込み、毎日の暮らしのなかで(もはやそれと意識しないほどに)生かされています。

Community

森が地域をつなぐ

多くの人を訪れることで、森はコミュニティ活動の場として機能します。多様な人の関わりは新鮮なアイデアや人との出会いをもたらし、移住・定住のきっかけになることも。そうしていつしか森の管理は「重い負担」ではなく、「ここに暮らす価値を増やし、喜びを感じるみんなの営み」になっています。

2066年 浸透する森

Business

森が仕事を育む

ソーシャルフォレストリー都市では、従来の「林業」の枠にとどまらない数多くのサステナブルなビジネスが生まれています。その実践は地域ににぎわいをもたらしながら、社会の中で森の価値を生み出し続けています。

はじめに

日常生活をふり返りますと、「気持ち良いこと」「心地よいこと」を求めて暮らしていることに気づきます。爽やかな風や耳触りの好い音。芳しい香り、肌に優しい感触などはいつも一緒にいたいと思いますし、そのような瞬間に出会いますとホッと心も体も安らぎます。

一方では、騒音や腐臭、人々のいさかう姿や言葉、不自然な形や刺々しい感触からは遠くにいたいと願います。誰もが心地よいものを自然に嗅ぎ取りその近くに身を置こうとしているようです。きっと「心地よさ=快を感じる能力」はわたしたちの中に自然と備わる「危険から身を守り人生を好い方向へ導くバロメーター」なのではないでしょうか。

伊那市ミドリナ委員会は、「心地よさ(快)を与える場所=森」という観点から、50年先までの森と人の関わりを想像したロードマップ「ミドリナ白書」を作りました。「伊那市50年の森林(もり)ビジョン」に則ってわかりやすく「森と人との心地よい関係」を提案していきたいと思います。この「森と暮らしの手引き」にその一部をご紹介します。

ミドリナ委員会委員長
柘植 伊佐夫

P.02 「浸透する森」

伊那市がめざす「ソーシャルフォレストリー都市」とは

P.06 第1部 | ソーシャルフォレストリー都市実現のために

1. 「森感度」を育む

- ・日々の暮らしを起点に
- ・長い時間をかけてゆっくりと
- ・体感を大切に
- 多様性は、すべての前提 —

2. 森の「快」と暮らす

建物／道具／DIY／エネルギー／風景／食／
癒し／スポーツ・遊び／祈り／創造(クリエイティビティ)

P.12 「快の森」 寺井茉莉子

P.14 第2部 | ソーシャルフォレストリー都市を実現する仕組みづくり

- 1 「市民の森」を、森林コミュニティの入り口に
- 2 「市民目線」で、見やすく、わかりやすい森林情報提供を
- 3 「森を使いたい」願いと、「森林所有者」の想いをつなぐ
- 4 「里山ビジネス」の推進を
- 5 森林所有者のメリットをともに考える
- 6 多様な事例の可視化と「顔が見える」ネットワーク構築を
- 7 学びと企業のお機会創出で、森林イノベーションのメッカに
- 8 一人ひとりが主体となる異種連携を進めよう

P.18 「手引き」の始まりは白書シンポジウム

P.19 伊那市ミドリナ委員会のご紹介

1. 「森感度」を育む

「森感度」とは、森を感じる力です。

少しずつでも森と触れ合い、関わり合い、足を踏み入れてみる。

そんな積み重ねによって、

森とともに生きる一員としてのまなざし＝「森感度」が高まっていきます。

日々の暮らしを起点に



「森感度」は日々の暮らしのなかで、私たちの内にゆっくりと育まれていくもの。とはいえそれは、「足しげく森に行かなければ得られないもの」とも限らないでしょう。

たとえばまず、身近な暮らしの道具を木製品に置き換えてみる。木製品に触れ、メンテナンスしながら長く付き合うことは、子どもにも大人たちにとっても、「森感度」を高める豊かな経験となるでしょう。



素敵デザイン、いい香り！

どこで作られているの？

どうやったら長く付き合える？

傷んできたら、
地域の職人さんに相談しに行こう

複雑につながり関わり合う、「森のこえ」に耳を澄まして

森は生命力にあふれています。太陽の光、土、水、空気を基盤としながら、目に見えるもの見えないもの、名前のついているものついていないもの、さまざまな生きものが複雑に絡み合いながら存在しています。

もちろん人も、その一部。しかし残念ながら、そのつながりは現代に生きる私たちには見えにくくなっています。森の恵みを生かし、関わり、「森感度」を発揮して”森のこえ”に耳を澄ませることは、多くの学びとともに、満ち足りたような心の安らぎも、もたらしてくれるはずですよ。

長い時間をかけて、じっくりと



子どもの学び
大人の学び
まなざしの交換
いつでも、
どんなきっかけでも



長い時間の流れのなか、常に変化している森。ならば「森感度」を高めるためには、幼児期、少年期、青年期……など、成長に応じた学びが必要でしょう。

答えを早く出す必要はありません。むしろ長い時間軸のなか、自然の営みをじっくりと身体で感じ取ってみる。そんな学びを継続していくことで、少しずつ、たしかに、奥深い「森感度」が育まれていくはずですよ。

体感を大切に

もし、条件が許すならば、「森感度」を高めるためには森の中で体験を重ねることがいちばんです。

たとえば、雨の日に薪に火をつけ、燃やしてみる。「何の意味があるの？」と、最初は戸惑いを覚えるかもしれませんが。けれど挑戦の先で、自然とともに暮らすための知恵や、自然の原理、さらに「意味のないようなことのなかにある意味」への気づきを得ることができたなら。その感覚は、きっと一生の宝物となることでしょう。



触ってみよう
嗅いでみよう
なにが見える？



多様性は、すべての前提

森や木をはじめとする地域の自然も、そこに暮らす人々も、かけがえのない「いのち」として尊重されるべきもの。そして、そのいのちは多種多様に、かつ互いに響きあって分かち難く存在しています。自然も人の生き方も、多様性を認め合える社会は、「森感度」にかかわらず前提と考えています。

かい

2. 森の「快」と暮らす

森を生かす暮らしによってもたらされる心地よさ = 「快」。

あらゆる場面で受け取る「快」の積み重ねが、私たちの日常を豊かに彩っていきます。

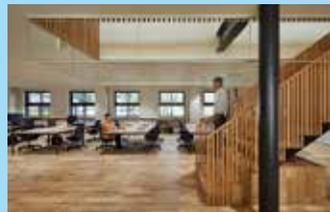
1 建物

人は森から木材を生産し、さまざまな用途に活用してきました。公共施設やオフィス、住宅などの建築物は、その代表格。身近な地元の木材を建物に取り入れやすいのは、伊那市に暮らす特権とさえ言えるでしょう。

今、木という素材が住宅で発揮する多くのメリットが見直されています。毎日過ごす「家」という場所で、私たちはまだまだたくさんの森の「快」を受け取ることができそうです。

【建築に木を使うメリット】

- 耐久性
- 断熱性
- 調湿機能
- 環境負荷が小さい(加工・廃棄)
- 地域の森林整備等に貢献できるなど



2 道具

家具、食器、箱、桶・樽など、身の回りの道具を木製のものに置き換えてみる。そんなことからでも、森や木を感じる暮らしは実践できます。畳床、食品のトレー、ストローなど、従来は他素材だったものを木製・木質に転換する事例も出始めています。加えて木材だけでなく、森で捕獲された鳥獣の皮や骨、苔・石等を活かしたインテリアも、森の「快」を感じられるものと言えるでしょう。少し意識して身近な所を

見回してみるだけで、すぐに取り入れられそうな森の恵みは予想以上にたくさんあり、私たちの日々を取り巻いています。



3 DIY

森の価値を再発見し、暮らしの中で活かしていくための方法に共通していること。それは、「DIY (Do It Yourself)」の精神です。

これまで時間や手間を省いてやり過ぎていたことを見直し、自らの手で実行・体験してみる。ものづくりや修理、庭木の手入れ、森や野の食材を使った料理など、森との関わりに「ひと手間」をかけることで、自分の暮らしの喜びとともに、地域の環境もより美しく豊かなものになります。そんな DIY の輪が地域の文化として根付いていけば、道具を修理する職人や木材加工施設など、自給的ライフスタイルを支えるコミュニティもまた、地域に豊かに広がっていくでしょう。



4 エネルギー

私たちの暮らしは、今や電気やガスなどのエネルギーなしには成り立たなくなっています。しかし、エネルギー利用は大規模な発電の場合、安全性や資源の持続性、自然環境や地球温暖化への影響などが懸念されています。また、化石燃料を使うことによる経済効果は、主に海外など地域外へもたらされてしまいます。

そこで今、注目されているのが自然エネルギーや再生可能エネルギー。なかでも日々の暮らしのなかで森の価値を感じられるのが、薪やペレットなど木を利用した暖房です。ゆらゆらと揺れる炎を見つめる時間も、森の「快」を感じるひとときとなるはず。エネルギー源である薪やペレットの調達は、地域の森や森に携わる人々との出会いのきっかけとなるかもしれません。



5 風景

木や森は、私たちの暮らしの中に日常的な「風景」として存在しています。アルプスの山々、段丘林、鎮守の森などはもちろん、庭木やその周りがある柵なども含めて……。

そう、風景は自然環境だけでなく、私たち一人ひとりが日々育てているものでもあります。ほったらかしにしてしまえばとたんにすさみ、不法投棄や火災などにつながってしまうことさえあるでしょう。

今、荒れた森や、育ちすぎた宅地周辺の樹木などをどのように安全に管理するのか、各地で大きな課題となっています。この術を多くの人々が理解し、ときにプロの手も借りながら管理できる状況になれば、森の「快」が増大するだけでなく、地域の価値も向上していきます。

6 食

森は様々な食材の宝庫でもあります。キノコに山菜、ジビエ（鳥獣肉）、昆虫食を含め、その種類は実に多様。そもそも、豊かな水を育んでいるのは森。大きな意味では「食」の起源の一つは森にあるといっても良いのかもしれません。

伊那市では、地域の農産物を森や野の食材と合わせて調理して食べる文化が古くから根付いているため、もはや当たり前となっている方も多いでしょう。育てて収穫したり、山野で採取したり、美しい自然環境の中で食事をいただいたりといったことも含め、私たちの食の実践は、誇るべきものがすでにたくさんあります。

様々な人たちとのつながりによって地元の森を意識した食文化がより深まれば、その価値は市民だけでなく、全国や海外にも浸透していくはずです。



7 癒し

ドイツには自然のなかでの運動と休養、栄養に配慮した食事などを組み合わせた「自然保養」の文化と歴史があり観光ビジネスが根付いていますが、それらの資源はすでに、伊那市にすべて揃っています。

しかし、ドイツのようにそれを普通に楽しんでいる人々の日常がなければ、せっかくの魅力も外まで浸透していきません。何より大切なのは、私たち自身が存分に森から「癒し」の恩恵を受けて健康に生きていることです。



8 スポーツ/遊び

マウンテンバイク（MTB）やマレットゴルフ、登山、カヌー、釣り、キャンプなど、森での楽しみ方は多彩。森のなかで身体を動かして汗をかいたり、ゲームをするなどの体験は、森との距離をぐっと近づけてくれます。

そんなフィールドが充実している伊那市には、エキスパートや指導者も充実しています。私たちはこうしたスポーツや遊びを気軽に体験できる環境に恵まれているのです。森や山での活動を楽しむ人々の裾野を

今以上に広げることもまた、森の「快」を受け取り、森の魅力を再発見することへの第一歩となります。



9 祈り

榊（さかき）、絵馬、おふだ、クリスマスツリーなど、古くから続く祈りの行事やそれに関係する場所・物には、森や木と縁の深いものが多くあります。しかし、合理化・効率化を求める時代の流れのなか、いつしか海外で製造されたものが中心となっています。

伊那市には門松やしめ縄、お盆の迎え火・送り火のための「カンバ（白樺の皮）」など、今も地域の素材を活かした祈りの行事がたくさん残されています。また地域材の棺桶を復活させるべくプロジェクトが数年前に結成され、製品化が行われました。自然に畏敬の念を抱き、祈りの場に生かす——そんな姿勢は、「森感度」の本質に通じるものかもしれません。

10 創造（クリエイティビティ）

森は、五感を研ぎ澄ますのにぴったりの場所です。森を、創造を生み出すための場ととらえれば、活用方法はさらに広がるのではないのでしょうか。

たとえば、都会のオフィスでのビジネスを森のなかに移すことで、円滑に業務が進んだり、新たな企画が浮かんだりといった効果も期待できます。ワーケーションの場として働き方改革や「新しい日常」を実現したり、たき火を囲んで対話の時間をもったり、新たな森の活用がすでに始まっている地域もあります。

また、創造力を高めてくれるという意味では、森は芸術分野にも親和性があります。自然の素材を使った芸術作品だけでなく、あらゆる芸術作品の創造のフィールドとなる可能性があります。その他、さまざまな場面で、森がもたらす創造力の活用が模索できそうです。



「快の森」
命の悦びが満ちる世界

寺井茉莉子
2022年
油彩、カンヴァス
606×727mm

第2部

ソーシャル・フォレストリー都市を 実現する仕組みづくりを

ソーシャルフォレストリー都市実現は、ここに集うみんなの手で。
市民、林業関係者、行政など多様な人々が集い、主体的に関わることができる
枠組みづくりを進めていきたいと考えています。

1 「市民の森」を、 森林コミュニティの入り口に

「森感度を高めよう」と言っても、森を持たない
市民にとってはどこの森に行けばいいのかさえわ
からないのが現状です。

そんなときはまず、「市民の森」(市管理)へ。
ここでは誰もが散策や自然観察などを楽しむこと
ができます。年間を通して開催されているさまざ
まな自然体験イベントや交流会などに参加すれば、
森のことをさらに深く知ることもできます。

すでに森林を所有・管理している人にとっては、
これから自らが森林をどのように活用していった

らいいか、ヒントを得る場所・機会にもなるでしょ
う。

「市民の森」が一般市民にも、森林所有者にとっ
ても、「森感度」を高めるお手本の森として存在し、
その機能を発揮し続けられるように。さらに「市
民の森」をきっかけに、他の森でも同様の取り組
みが広がっていきます。

市民の森・・・鳩吹公園隣接。
詳しいお問い合わせは伊那市耕地林務課へ

2 「市民目線」で、見やすく、 わかりやすい森林情報提供を

伊那市50年の森林(もり)ビジョンでは、市内の
森林を「山岳ゾーン」「環境資源活用ゾーン」「林業・
木材生産ゾーン」「山地保全ゾーン」の4つに大き
く区分していますが、こうした広域のゾーニング
とともに、市民にもわかりやすい森林情報が地区
ごとにオープンになっていると大変便利です。

たとえば市民に開放されているエリア、車いす

の人でも入山できるエリア、薪生産などの地域活
動が行えるエリア、キノコ山で入山禁止になっ
ているエリア、地元集落住民が管理するエリアなど。
一般市民のニーズを起点とした森林情報が、簡単
なルールや連絡先とともにインターネットなどを
活用し公開されていると、森の存在がグッと近く
なります。

3 「森を使いたい」願いと、 「森林所有者」の想いをつなぐ

森の良さや楽しさを理解するようになると、次
第に「森の中で独自に活動してみたい」「木を利用
してみたい」「森を所有してみたい」などの思いが
生まれるものです。一方、山村地域における高齢
化が進む中で、森林を誰かに任せたい、手放したい、
と思う森林所有者も増えており、「若い人たちが一
緒にやってくれるなら、もう一度山と向き合っ
てみようか」と考える人もいます。

森林所有者と、利用希望者の思いをつなげるには、
どのような仕組みが良いのかを議論しながら、森
林所有者ばかりが負担を負わない新たな森林管理
のあり方を模索し、「使いたい」と「使ってほしい」
をつなぐ動きが面的に広がればと考えています。
また、森の管理そのものだけでなく、木材の利用や
庭の手入れ、DIY、森の多面的な利用などにおい
ても、市民と森をつなぐ仕組みが必要です。

【木材のマテリアル利用】

- 木の家と長く付き合っていくための情報提供
- 木を使うことの効能に関するエビデンスの提示
- 先行事例としての公共建築物の木造・木質化

【木材のエネルギー利用】

- 最適なシステム導入に有利な支援を行う補助制
度の創設
- 燃料の安定的な調達のための仕組みづくり
- 住宅・不動産・建築関係者との連携による小規
模地域熱供給事業の事例づくり

【庭木等の自己管理】

- 樹木医や造園・土木業、緑化木販売業、林業、
特殊伐採業等のネットワーク構築
- 市民からのワンストップ窓口の整備
- 市民向け「身近な緑の環境づくりDIY講座」の
創設

【野外フィールドでのスポーツの普及】

- フィールドとなる森林の適切な管理と利用者
マナーの醸成
- 提供側の安定した財源確保や経営基盤
など

4 「里山ビジネス」の推進を

今、市内の里山で展開されている「森林整備」「薪づ
くり」「森林教育」などの地域活動は、これから50年先
も脈々と続いていくでしょうか。持続性が担保され
る仕組みがあってこそ、安心して活動し、仲間を広げ
ることができるでしょう。

持続性につながる枠組みの一つとして、里山とい
う場を活かした新たなビジネスを後押しする仕組みや
制度があれば、その動きはより加速していくでしょう。

たとえば、
・移住者等に対して「里山レンタル」を行うビジネス
を起こす
・キノコや山菜などのオーナー制度をつくる
・有料MTBコースを整備して運営する
などの実践をさらに促進してみてもはどうでしょ
うか。

また、多様な人たちが里山を管理・利用する活動を
「制度化」することも、持続性を担保する手法の一つ
でしょう。林地の貸付制度も含め、森林所有者以外の
第三者が行う多様な森林管理の仕組みを整備すれば、
全国でも先駆的な取り組みとなるはずです。

5 森林所有者のメリットを ともに考える

多くの人が森に親しんだり、森を利用することは、社会全体が森の恵みを広く受け取るうえで必要不可欠であると考えられる一方、森林を所有者にとっては「なぜ、自分の森を提供しなければいけない？」と考えるのもまた、自然なことでしょう。

森林所有者以外の第三者が、何らかの形で森に関わり活動しようとするなら、森林所有者の理解を得ることが必要ですし、そこには森林所有者のメリットがあってしかるべきです。

そのメリットとは何でしょう。お金でしょうか、森林管理の労力の軽減でしょうか、懐かしい山の賑わいや、新たな人とのつながりでしょうか。きっとそれは、人によって、森によって、その地域や歴史によっても異なるでしょう。

森林を所有している人との信頼関係や合意の形成とともに、個々の森林所有者のメリットについて考える機会の創出も、ソーシャルフォレストリー都市の実現のために重要と考えます。

6 多様な事例の可視化と 「顔が見える」ネットワーク構築を

どのようにしたら、森林所有者との合意形成のもと森林の利用を円滑に行えるのでしょうか。そのヒントは、すでに市内各地で行われている里山での地域活動にあるかもしれません。西地区環境整備隊、西箕輪薪の会、上牧里山づくり、高遠森林クラブ、森だくさんの会、NPO法人森の座、伊那市フォレストスターズクラブ……等々、私たちが学ぶべき実践は足元にたくさんあります。

また市内には、森や木に関わっている様々な人たちがいます。林業や木材産業のスペシャリスト、森の恵みを活かして多様なビジネスを展開してい

るプロフェッショナル(飲食業、観光業、燃料供給業、松茸生産者、建築業、芸術家……)、行政関係者、研究者、自然保育実践者、そしてもちろん森林所有者まで、じつに多彩です。

これらの活動情報に誰もがアクセスできるよう、わかりやすい形での可視化とともに、すでに行われている事例や成功の秘訣を共有化するネットワークを構築することで、「森の自治」とも言うべき多様な活動が一層広がっていくことに大いに役立つと考えます。

7 学びと起業の機会創出で、 森林イノベーションのメッカに

森林イノベーションとは、様々な森の恵みを活用して、暮らしやビジネスに生かすための技術や仕組みの「変革」です。「森が浸透する社会」となったソーシャルフォレストリー都市・伊那市には、森や木に関わる学び(教育)やイノベーション創出の仕組み(研究開発、起業支援、需給マッチング、ネットワーク構築等)が、コンパクトに用意されていることが理想です。

そんな地域は、国内にはまだ存在していません。けれど、伊那市とその周辺を見てみると、大学や技術専門学校、小学校や自然保育に民間機関まで、

森林教育やイノベーションにつながる環境が驚くほど豊かに整っていることに気づかされます。

このような基盤・素地がコンパクトに集積した地域は、全国的に見ても稀なもの。今後は、こうした基盤の一つひとつを今まで以上に有機的に繋げていくとともに、起業・創業支援など、イノベーションの創出をより意識した仕組みや拠点を創造していく必要があります。それが実施されれば、伊那市は全国随一の森林イノベーションのメッカとなり、市民ぐるみの理想的な「ソーシャルフォレストリー都市」が構築されるでしょう。

8 一人ひとりが主体となる 異種連携を進めよう

森林イノベーションを進めるためには、これまでの林業や木材産業が、縦割りの産業意識を破って、異種と連携することが重要です。これは産業に限ったことではなく、行政機関や学術研究の世界も同様です。

森と福祉、森と教育、森と移住、森とまちづくりなどなど、多様な分野が森と関わり合いながら連携することは、私たちの日々の暮らしに照らし合

わせればごく自然なことでしょう。そこでは技術や経験の有無にかかわらず、ここに集う誰もが主体となり得ます。

水源の水が、多様な環境を経ながら川上から川下へと流れていくように。さまざまな壁や、しがらみ、分断を解きほぐし、多様性を尊重したつながりを育むことが、ソーシャルフォレストリー都市の基本となるはずで

森が暮らしのすみずみまで浸透した未来の伊那市。それは、一足飛びに至れる社会ではありません。確かなことは、それを造るのは今を生きる私たちであるということ。辿り着くまでの道のりを、みんなで知恵を出し合い、トライして、泣いたり笑ったりしながら進みたいのです。この「手引き」は、そのために作られました。みんなの手でどんどん更新して、望む未来に向かいましょう。

「手引き」の始まりは白書シンポジウム



2020年2月23日。手引き作成の始まりとなる「ミドリナ白書シンポジウム」が開催されました。「森が暮らしのすみずみに浸透する50年後の伊那市」に向かうために、わたしたちには何ができるのか？ 100人を超える市民が語りあった一日です。

「教育」「エネルギー」「住まい」「食」「観光」

この5つの分科会は、わたしたちの暮らしを織りなす太いたて糸です。これらのたて糸に、森というよこ糸を組み込む未来を作り出すために熱い討論が交わされました。

その熱気の元は、全国スギダラケ倶楽部代表の若杉浩一さん（プロダクトデザイナー／武蔵野美術大学教授）による、涙と笑いに包まれる基調講演でした。厄介者扱いされていた日本各地のスギに注ぐ愛と行動の逆転劇は、「森と暮らす未来に向けて何かしたい」という参加者の思いを大きくふくらませてくれました。

その後、コロナによって大勢が一堂に会する機会は持てませんが、このシンポジウムの討論を核に、本手引きの作成が2年間続きました。ミドリナカフェ、森JOY、森マルシェなどで出会うさまざまな方たちと意見を交わしながら練り上げた成果です。森と人のいい関係を築く未来に向かうよりどころとなることを願っています。



シンポジウムを元にまとめた「ミドリナ白書」はこちらからお読みいただけます。(PDF)



白書シンポジウムの詳細はこちらからご覧いただけます。(報告書 PDF)



2020年2月23日 白書シンポジウムの様子

伊那市ミドリナ委員会のご紹介

伊那市ミドリナ委員会は、市が推進する「伊那市50年の森林(もり)ビジョン」をサポートする委員会です。「森と人との美しい共生」を提案することを目的に2018年4月に発足しました。ミドリナ委員会は、「森・人・美」を理念に掲げ、森のプロモーションを展開するとともに、様々な活動を通して、市民のみなさんの森と暮らしを近づけるお手伝いをしています。

伊那市ミドリナ委員会の活動(一部)



毎年開催している森と歓喜するイベント「森 JOY (もりじょい)」。

森のマルシェ
midorina

森の物が買える、森の仕事をしている人とつながるマルシェ。森の産直市。



森のことをもっと深く知り体験する小さなイベント。年複数回開催。



地域の森から抽出したエッセンシャルオイルや蒸留水の開発や活用。



YouTube で、伊那市の生物や、森に関わるお仕事などのご紹介。



ただ森でたき火をするだけの一日。大人も子供も森でまったりする時間。



季節ごとの森の恵みを丸ごと味わえる究極の一皿。
<https://sicanan.base.shop/>



暮らしに森を取り入れられる、地元材を使った DIY の入門キットの開発・販売。

ミドリナ委員会の情報はこちら

公式ホームページ
<https://midorina.jp>

HP では、最新情報や過去のイベントのレポート、発行物等の PDF などをご覧いただけます。



公式 youtube 「森のチャンネル」

YouTube チャンネルでは、伊那市の生物や、森に関わるお仕事などの紹介をしています。



公式 facebook ページ

不定期で活動の報告などをしていきます。イベントごとにイベントページも公開しています。



公式 LINE グループ

アカウントからイベントの情報などをお知らせします。右の QR コードからご登録ください。



お問い合わせ

伊那市農林部 50年の森林推進室
(ミドリナ委員会事務局)
電話: 0265-78-4111 (内線) 2416